竹生島
之巻
源氏供養
三
謡
物語

特42
4
452

255
111

早三大倉次郎
引

竹生島

竹生島ハ琵琶湖の[illegible]に竹生嶋
[illegible]抑是ハ延喜式に見た
[illegible]なり[illegible]さても紀列竹生
島の明神ハ靈神[illegible]座ハあるに
[illegible]君ハ[illegible]たゞ今竹生
嶋へ参詣仕[illegible]四乃[illegible]河原[illegible]

明治
41 2 19
内交

なれをあとにかぎ河原乃みまとすを
をあさ名ををしてもみれ水の月く
ををぬ四代乃ぬ可ぬ関の宮居
をみてををを山越ちをた志賀のさと
鳴の浦ゐも美ゆをり〳〵ふハあれと
を弱ゐを来り浦を眺うすゆをれ
ワレテ女付ニ中ニ吟
ニ対イ及 面白や比ハ弥生半なれハ波も静ゆ海

乃おも 震ゆをる桐ゆけ ちまゆ
をゆゆ乃みちうきつをなを心れ
シテサレシヨウ
ゐ 是ハ世うゐ果ゆ伊弱で明をれかよ
うゐ乃の 数を はてゆひうを
ゆけ屋をを俺人のひまも浦乃ゆ
明をく世をゆをに ゐをゐをまを
ゆく同ゆさ なゐ世ゆ ゐを

なるか此海の物とも名所多き都なるに
浦山うけてなるひまもなき夏のふやこ
もなどその昔なるべし山桜真盛に
八重の紅咲ひいき漕よせてとゝうん
いさゝかたゝせくおとゝもんいるあれ
なる舟近くよる船人 是を山田
矢走のまつもあるに近くあ

釣舟あまくしも泊あまとはこて
あれども伊勢にまして是ハ竹生嶋
と集清の者なり ちゝびの森に桑く
き也 実此島に昇ぼりて あゆる鉦
もちひ給ふ人をいなとやきは清心
みもちひ又神慮をたゝり給ひて
きゝハおゝめと集もん 行や是

中巻

こゝ迄ひの船法のちゝと見えたり

今はゝと さゝ長周ふく ゆゝ加ゝ風

もの 名こゝ連や 志賀の浦

おもちつゝへ船人かゝ やおゝ見れ

て浦をなつゝ船くや 所ハ海のゝく

所を海のと 国へ迄の江りちゝき

山ゝとゝゝれや 花ハさゝれゝ白雲

のゝゝ猿るゝ晴さゝぬ山ハ紅ゝて

ゝるとやなゝさえゝ るまの月ハ比良ゝ

根ゝ吹ゝゝ沖漕舟ハゝ

松のなゝひの地もゝ すゝ雲みゝよそ

よゝ人ゝ松なゝ ゝ初ゝゝを

満ゝ行ゝ程ゝ行ゝ 生時をゝたゝや

緑樹ゝけゝんゝ 魚ゝりのゝる

きてきゝ所り月海とうんてハ鬼も
涙をたゝらう面白のうれたきや
のうくふりたいて神おるに年く
心得申ていやるとり作らの鳴く
そ女人禁制のよりけいまたり
おようしらとりあまなれめ性へ何て
まるくれくらうれハ呂きぬ人

の中事みくらして其故ハ是則九生
如来三大秘意なるなと更女人て
寄りくれ のくうまを迄もなく地獄を
罪女天ハ女旅ふくく其神徳を
あくなる天女と現おかまをん
女人て濁なり たきぬ人の河
なりかる悲願をおくて正覚年

久しく柳を通るのいとよう和さ
さしておくふしぶし宮ゝ行と拝ひの
里
荒磯鳴の松陰を伝ふよりする波
小ゆるされハ人間あるひとて社ゝんの
廊をおひしき殿ゝを拝ひれへ
翁を水中ゝ入るとみて白波の立ゝを
和ハ此海のゆふとそいひ捨てゝ

海ゝを給ひ給ふ賀茂神殿ゝ参り
鳴動して日月光を雲晴て山の端を
るゝ見れば海ゝ下りかゝさよ
委
和ハ是ハ鳴るをんて国土を治る神
天ハ和事なり其時音楽
聞えゝ花ゝ降ゝ来るの夜乃
月輝ゝし女ゝなるとこのくもなる

さるゝ中や舞楽を時過ぐ
夜遊の面白さも時過ぐ月をかゝやく
海たゝに波風頻に鳴動して下界の
龍神顕はれたまひ龍神湖より出現
して光りかゝやく金銀珠玉を
ふれ撒くさまぞきを絶りる
奇特ふれ働えより衆生さいとのち

ゝびくさゝぐれそ水ハをゆの
かゝちを現して有縁に宿生の祈ひ
ゆゝなくまさハ下界の龍神を
なゝく国ちゆちるちひをのゝて
天女ハ舞ふ給ハ龍神ハ
湖水のゝくよ翔て波を潮てみを
ゝて天地ふそ加ゝ大蛇ゝる

ちぎりあるたびのうらみは
宮ゐ[illegible]ぬるかな

籠

ワキ信濃

是のぞきてかすかなる山より出る新信濃
てゝ見れいまさみをこそ見ぬ
このもとに松をひろ都のなかなる松
上未詳
松心つくしの海のみなもとてく
八重の汐路をとをく[illegible]
くもの雲の浦[illegible]煙くもゝ見てし松原の里

の名をハ源氏の滅生田の河ハ
是なり〳〵多く種ハ是をそや清
四生田の河ハやゝ作まき是なる
梅の木をハ木なすれ色うつて
く作種をハうりなるもを今ハ
末代
末世の矢の生田の河ハ流れてそや
き月日ハなを 死苦落葉の無常を

又栄位不滅の栄をなゝ一色一香
乃艶情を無秘中道のまなこに在
しゝ人を間えんどを観念形を
法〳〵ハ羅〳〵あ〳〵めなり分
上やゝ人間有為の特をハきんちの
うちをハ〳〵くハ回流るゝ妄
執の〳〵其生死の海なれハ生田の

河の武代まで夢の御ふ迄て舞
ようとても身の分定めありとても
孫ハ業内たちなゆらんくいる
是なる人ハ寿命き事のこなる
事みくらい何すみく作り是なる
梅の木ハ木ハすれ色ありて
くれ程ハ能ハ入く体もの梅ハ

名のいやらん さん作是ハ能の梅
とてそれ梅みくらく あ面
白や能の様とハ川の世よりの名本
作やらん いや名本とハ寄人の御ふ
も影 ものもをとそ人 色ハ只
ものくみつけ ハ寄名ハ
なくく形付 ハ異名なり 社

物ときこゆ引きれ籠の梅ひいそれ
あくこ拾ひ給ふ　拾て此生田
杜へ平家十万餘騎の大手なり　梶原
平三景時　源氏京雀一の木戸きつく
おとし　分捕高名目ばかりおとろす而
は景季　行とう田ひとん此梅花の枝
を手折りく籠ゆ次此花笠さす

とかりく高名をはを
たりとみよりく景季とりく是
を持　則八幡　家成の神木を
いもりより名は將の古跡のそれ
なれとそ籠の梅とハ也　扨の名
將の古跡とい名ゆ名張はを
ものなるよ　くれハほとなきまの。

ゆかりは物に名をとめて　其景季の
ほまれなりし　名木の花の白梅
箙の梅乃　今迄も　名残とめしる
しハ花の景季の〳〵　末乃世かけく
生田河の水を捨てゝ名ハ久しき
武士のやさしき心乃あはれしく　ちる花の名
こそ妙なれや〳〵　さても平家ハ

あらましの室山備中の水嶋
二箇度の合戦乃うちかちて山陽
道南海道あはせて十四ヶ國の
さその勢合其勢十万餘騎は
の國一の谷にぞ籠もる　東ハ生
田の森西ハ一ノ谷をかまへて其あひ
三里が程ハみちくだり　浦とまを

数千渡れあるとうく、漕ぐ人毒
いくそ立なくまき凡なのきてふ
艶ふありう海、稚大雪と降くと
見てたり、恋てく此城の前を
海うし沈ハ山だハ須ケ方の
とうくうりり子舟のなわの
ちとも絶うあり時もきけ

ミ旬の雲れ事なまハ須ケの若木の桜も
まう咲ぬうし雪のけくる流を元
ま生田れおのうう聖とそて、つ色
凡する梅うえ一本ひうもてハ天下の
春よりいくさの首途をいう心の花
を咲うけぬ生程ま味方の場六方仏
弥を二ダまるけて敵軍強の追手

かゝめての海山うゝけく浪の浦四方を
うゝみてあり　よすがら　魚鱗鶴翼も
新たゝり　明方の浪の山おろしもきゝわたる
の雪は白妙の袖をかたしきあなうる
はしを　はゝわる其きてき雪なく
つゝおひつゝ　海人きゝ海くの
海士の面新　あけみていたりをを

やもうけ　ゆゝ　嵐を　須磨の浦
野をも山をもこきよする　音船ハ
うゝあまの面　風ふもかゝ　ゝ
ゆゝゝの梅の　月なりり　秋
一ゝの面を　ゝ　秋をなりも
白雪の　もの　ゝとおりめきん
下みゝ待ゝまく　それのゝゝと

おなじくへんに今は
何をたゝむくさ秋は世なき影の
沈とうまんと夕草の其景色より
世界なり乃為他生の縁ありて一樹
芝生のまなの孤なる梅乃本草
ふ所をを結ん秋はまよをを咲て
此花よりてらなりこのまれよ

とて失ぬ秋乃
乃家ゆうて法く更りまた
生田の水もむすまる花
の本陰ふみ分ふりく蛇ハ陽
みなり況を陰ふ秋心初夏の
俤の一とさりく生田の名ぶ
却面ハうく作みたとり紅

波ハ梢をなでて散てちゝ骨
とゝくきゝひ月ゆを日をも
手ゐ取りけかや老あのやをと眠
をゝくゝゝ心をゝみゝゝ修羅道の
くゝゝを仏後きよ　てきやれを松
いまゝ武者のやなゝるゝ梅花の
枝をゝゝきゝちゝくと見て詩よへ

ゝれる人ゝくゝ海ゝ市ゝ今ゝ
何をゝ法むゝ今ゝ是を源を京春
仏生乃孫の一樹のうけよゝ宮中の雲
面かゝうんをなゝ法力たゝきゝ人な
きゝ法法をえゝんとゝくきいの況み
ゝたゝて春ゝり春ゝ孫とび法とい
ゝんとすれゝゝやはゝ恨めゝやみ修

雷は嗜恵の責任をとるまゝやはひ
しを言ふ言ふれをおろがやゝ詠を
雨と降りうるおく雲りひきて
地をうつく山を震動はなり
雷失もみを恵風の紅葉の移
をなしく御の樹をうしく周囲
ゆる生命何の活をみをて山里あり

を皆低羅道の
いるる淵まやゝ
ちまとなりねとん
れをそ所そして田なりり時を
をゝ春の梅の一枝手
おく籠をさん中より
りの武者ふあひ
かれ籠の花も

さきうきんとの心は花も梅もちりか
ふくおもしろや敵の吾妻とんぐ
通敵よ也されとそ八弱う中ま面ゐ
まもて甲を打おとされく大ゐ
ハの姿となつく京ホ三弱ホ
ゆを合を向すのをを ねを手
又廻りあくの車きり 蛸手かくホ

志十文字 鶴翼 花行の祝御祝
ゆふ夢さめて志
ほくとおもはれハ是迄なりや松
人よいと唐て花ハ根ま島ハ告巣
みつ〻ま美の名ハ古巣ようつまなり
よくくとびて なるなく

ワキ侍従次第

衣元国　源氏借養

苔むしたみち〳〵石山寺の

集うん　ワキ詞　是は安居院の法師にて

秋石山を信仰常の歩を運び候

きりも赤きもとおりひとはなと名

元元の松を立出く嵐のつゝ

夕波の白河おもてをひたす清水

を始めとして、関のこなたの相模
さまでも移る左明の影も所なきまで
鳴の海の面白きまでなるに、
漕ぎ出でて、唐崎の一つ松、堅田
浦の浪立ちつる水煙なれば、
のう清水よりまき事作法下とい
はなされ事みくいら行るみていて

秋石山は龍源氏六十帖を書きて、
なほ記まての筆にてさびなかる
又とへなりてれた彼源氏は紫式部
をせきり秋よりは今迄もう
ふ事なく侍くに御ふ石山にて
源氏の借養をのぐ又秋所とぐく
ふひぐぐと此事やさん屋は是迄

申し候 ワキ いや〳〵是ハおいゝく源
氏の供養をのぶべき事ハ安き間の
事なり扨て御身ハいかなる人ぞ
シテ 先石山に籠りし源氏乃供養を
のべ給はで其科も影れなくともに
源氏をそらんじて ワキ上 されハや
それなら奇特なるいゝく源氏を書

シテ上 聊しや此身ハ浮世にちとかれ
ども ワキ上 名をも埋まぬ苔乃下 シテ下 石
山寺にたへし雲の ワキ 紫式部こそまし
まはおか シテ上 あらはるゝや見ゆる紫
の 二初同上 雲もそなたの夕日影さして
それとも名乗えひだきゆると
失にけり ワキ さて石山にまゐり

ぜ念願をつとめ事をはり夜も
更るこの鐘に祭心もまめるわり長
方法源氏乃物語をおこなはんと
事なれば供養をのべ給ふ
菩提をとぶらへきなり
とはおくともこの世のくるるは
ちりぬる業乃色あまたもひとつ

あるみも清くしたの光源氏の物語
同じつけても甚まことに軽くなる
心ゆかれぬ風もちまへられと
なる物を思ひ山の下紅葉名も
紫乃色ふかく見えん姿へ
なるや夜を深更なり。
島の苫をさ海をとゝろきわ長。

上

灯の影をたゞ濃とはなつて女郎蜘蛛

乃うしろ姿の

そよ〳〵と秋風

ふと〳〵たゞ〳〵夢り現りおち

はをか　うりひ安き色色れりき

ねの衣ぬきさて紫乃色こそて見

そゝぬ枯野　萩そゝの有増まと

ちゝは名残すとさゝ　名ともさや

蜘蛛の糸ふたゝび切て増れ蜘蛛

きそ〳〵心ぬはぬ郎ゝ〳〵

まぬ　秋ゝなゝ秋ちゝ　其

俤ハきゝ姿ゝ　姿ゝ　ね

ハ　ゝ心を　おゝ　ゝ

明そ　月ゝ心　石山寺

の　ゝ声　ゝ風ゝ前

消ぬべきに灯の光源氏にかゝ
とちんくあるべきに仕事やか
有難し御事や何とか布施を集
侍らんいや布施かゝはりしもよ
以ゝとても世をいとはぬ身なれば昔よりの
の袖只今まうて刀を拭く形なら
きりとてわたをいうて肖るを

そくさきはなんとくをを
より其名も変さだの家ぶき
らしたれ日もくれなゝ母のあるを
をもちをりなるよりをを
とれ胡蝶の一あそび夢ばかりな
る舞の袖くひるまのひとよ
花咲とは乃を

抑無常はいつを目の前なれども
うつもなく一生を空くすごしたる
あかつく百年の齢を受る槿花一日
唯松のみ[サシヨエシテ]ありまハ春の秋の朧月
夜雲なかめに日[ヒト]源の光景雲ゆ
の雲百年や須臾のうつせみ
しめる所住居[シテ]宮[ルコトニ]なる数なるぬ[ヒ]式紀

頼をとゝけく石山寺悲願をたの
籠り居て此物のうつり行業はゆ
[ヒ]れ此物は借養をせうつ秋ふ
より忘れの雲も晴かて[ヒ]今あ
かつて縁は松りて心中は諸願を
松ひとりの老ゆる宮し空明は
眠をなしび南無や光源氏の出家成ル

匠（オトヽス）に曲（カタ）て相違せし夕の名残り迷ひ法性
の宮をいとり帰木によるの夢
路をいとしく夕顔の露の命を
歎く若葉の雲のむらく揚羽の
蝶の庭を紅葉の秋の落葉
もよりやたる適佛意をうひなるこ

慣本葉にさて往生を祈る
花散里は生をとても別離若
紫りまゝかれ相かるを道とや唯須
臾生死流転須臾の涙を出く四智
圓明の赤石乃浦を澄極いつまてと
あるなん唯蓮生宿をゝ菩提
をを所とて松風の吹とても

業俗の唐雲八たる事きこえなし
秋の風沙すて雲麻呂唐蘭上
品蓮華心をうげく南と阿彌七
寶花嚴のまたたらずをとりゆ
ん梅うえん白しるしたる秋ちう
藤のうゝ紫なる雲の其ゐ紫をも
ちゝ樓のひゝ秋まれなすあさ

六梅樓の陰よ雲を名も高きはさ
信を四阿屋の内よおめてたのみ
さえを深みなたとや見も
晴蛉の分なゝ夢ちとち
をちちちちち所の未遠を所よ
屋に南無や西方みぬ東狂ち待
徳をゝり捨ゝ学部彩り後世を

なをげ給へかをもろともに徒おろ
して四方を眺をいりぬ空面白や
箒人の名残今ぞ嘯島に言も
をしく侍れ　光源氏の位あるべきを
辞法の力にて柳もうゑんとて
その面のえんに移すや　言や柳は
秋ぞ来りぬ名残の影なり　撞の雲

稲妻のうけ引つまで伝るぬ定めぬ
浮世や　能を物を楽まして　宝祝と
中は彼石山の観世音かりよ世を
現ぜ給へ　源氏の物語是も
を　人を言世へ人を言ん方便
空あり　ちりぬ　ちりぬ　の言の
らきそも夢ぞ　あるの　さと紫

なりゆめがたりの河なり

三輪

是ハ和州三輪の山陰ゟ住居致候
玄賓僧都ゟ[ニ]賞ハいたゞき
ぬ女姓毎日榊閼伽の水を持ゟ
作[ニ]今日も来りてくれゝゟなる老ゟ
栖を尋ねてゝ[ニ]ハ
道もなく杉原のおゝをたゝん

サレコエ

実や花の石室をて世の中をみ分を
猿を哭き秋を送りたん淋まやや
あすの事なくていうくて寝る月
を三輪の里は住居をる安て侍
又西山隠り宮寛僧都とて貴
人の位入程はいりを搔開加水を
持て来り作たるもあるくそや

山ワキ

世間案内やくん山
頭まは夜孤輪の月を載き洞口は
い朝一片の雲を噴山田をる僧故
の名ゝそかなもれ秋をてぬき
いとゝ人をなし

シテ

世間案内やくん
案内やきんとはいりも出きみ開加
のふを抜く来る人う山影にはる

ツレ

八ツ、推とも出で月光地に敷て
掃くとも還生ぬ　鳥聲長みて
老生の閑居　葉のあと戸を
打ひらきかくれもなつかしきり
きを霜をたそげくるし絵く秋
さむき窓のうちに軒に松風
時雨本葉掃しく庭のおもかは蕭や

とちらん樋の水音も苔に閑て
閑る山をみるさびしきいに
僧都ゆくき事ありて何事をしてい
妄る浦衣を一夜絞りしく何と衣
の所をやに安きことを先ちをも
まつせん　あるる紙やさらんは頃
ひとん　老は程毎樽にかれをを拾て

来り訪ふこころきしねども有驚
いとねんごろに住侍る人う栖
をはらへ侍へ栖をこの輪の里
山ずとちきり所なりもわうたを
こ輪の山をこしくハと詠なれた
何しる秋をは尋ねおきなるう
物も不審なれ侍めきへ訪ひ来まを

又
枚なるこをこをまをくるて尋ね給へとい
捨くうきにしくしくりうせまを
草庵をこ出くゆけへ住なくこ
輪の里ちきにうう山陰の松へこ
もをなりきりに枚ねくこて
りなる神垣へいくなるこん神垣
こいつをなるこん すきやおられ

あ、杉の下枝を見れば、ひりつる安人
よあくばる衣の袖かをたるそやうり
て見れば衣の裾よ金糸の文字をぬり
濃てゝれい奇なもこの輪はきよく
さらたる袖をおりをそ
を思ひ後レテと早振神を彫ひ
ゐるなる人の値遇ふあるらけき

是なる杉の二ともより妙なる清
琴風えさせ給ふやうくはまを
の流をのまひをてゝ正姿を
ねまれたもしまをせ念願ふき感涙
な墨の衣を濡そそやそりて
なゝ秋深ふ人よまるくゝて罪
をゝすけくなひ給へいや見秋へ

人間よりは是ハ妙なる神たの　農
生活度の方便なるを　さそ、成
よひの　人こゝろや　安とこ稲荷神
くちそやうけ者　下うく　唯祝ふ
ゝ気なるこゝ　りうきねをすれ
くよりけこゝけあく　たかえ　ふ
けなの五事や　大神代のはり

拍子うハ未代の元生為　海方仮
の清品く　世乃ゝめなり　中も
世數鳴ハ人多ゝく　神力まひ　五湯
の庫よまゝり　志ゝ心ハ　衆の
大和国よゝ　久ゝき大婦れ者ゝ
八千世をこめゝ　結かゝゝ色を
新ゝきゝに　曲下　されゝも人衆くれ

とも書人くし或夜のむりとに法
がいなる故よりかく年月ばかく
れ分の屋をらはむの夜
あくてかよひ給ひねいを不審かり
き事なくたく同くくとかくよ事
ちきりをこむとかりかハ彼人巻く
云板言もきくらいまつりのきりて

よそやきくれなを今より後を
通まつ契りをこよひきりもり
や寄るかれいさひらあまのうらて
さしぬる所をきくんとてをるまおに
きりをつけ嵯よられをもちつけく
所をひくくあひ給ひまくまきの
条もくきりを結ぶやきやうの内れの

力おさへらるるの心とりて行はる
所山岸に神垣や松の下枝まで
なりこしらへもあり
人の姿に甚多の
より三輪の
ふるはをて所や
地獄をきたづけ
頼をこそられ
かより歩くいまや
さめん
神をもさんとて八百萬の神遊ひ
見そう神楽のもちめなに
早振天の磐戸を引こそ
あとなく入給へ常闇の夜とや

さそ神代の物
野彼人をなく
見 先八磐戸の甚姫隠れ
子
神

ありぬ　八百萬の神たち　集たれ
前まして是をあしき神樂を奏て
て舞給へ　夫寫太神　其時は岩
戸を少しひらき給へ　こゝやうう
雲晴く日月光　てかゝやけるに人のわた
もて　さらくと見なれ　はるゝもと
神の御舞　ぬ　なるそめの

拍子　おそくハ伊勢とこ　猶乃神
おすくハ伊勢とこの神　一舞ふ所
の事　今更なると岩倉や　其冥の
戸　夜もひをりありさきゆ　免れ
住をさむるや　名ぶなるらん

鞍馬天狗

ミテ山伏

見ハ鞍馬の奥僧正ヶ谷住居也

客僧ようくしん今ハ一ツ山の紀国之事

くわしく物語る

ヨキ山伏

しかるに何と西谷ようの人とくわ則我い

て見くらるみてしかと何ゝあみ光今を

成とり見てしまなるやはる信ものあつ

らまに一業ならしめんと欲す曰く今
しかくまうまに毛さうを咬をおう
すでにもてめ仏と云而ふきうこの心
なとひ青信なくとも本信まくく抜
徒をおた花さうへ出さんといひ山里
のくに仏ひいきうり馬まくく鞭与
のとのうしに横ゴまれりをうくく

みくおくそ迷ひ咲ひ色本ら
きてあを居ていきく花をなめん
言語道断の事まて作業をり
作をて皆〳〵疑をたれうに逆
よ人家をひうく死あまる則人を
業賜と親疎をとを論をさ彩を社
言のなうひきう抱と法世をちう紀

くゝあるが年をるの大地多門天嵐雨
よもれたるくゝれ　牛若丸　宮や花の
年代半月の宮落月前の一夜の
友それさくより　うるあるを
いそやちかよりく花流く
思ひらくを夏出代音よたゝて
ぬ涼山かれを　仏法ひれみかくさよ

此山は　牛若　あるも　ひなまくしくもの
たちまくちくわへきくなど
雖　なれも　知れ人をむ高砂の
牛若　松も　れくの　ヒテ　ものの　口と　正相笑
ひの種まくやこと世ち業　けさ立
くさの　花　ヒテ　くさの
梅きてくう　花の情なの　ヒテ　もなこ春

たゞ有人にあを別そめくみち
いろんうちつけなる心なる
ものゝ別は定なくて意氏あきらん
ゝ、さよめるやゝ仏今れが人
きハ皆ゝ沙りはなゝ何として仏氏人
ぬ事まとゝ平家ん仏今の見きを
平家の一門中も安氣雪清盛う

ゝもなりよりて平家の賞人数
他山の賞て時の毒なりかゝ
も同山なるゝ、ゝも萬面をなき
事共みゝ同みも花みを捨れ
てゝ あゝゝや仏法氏
の頭領常盤腹まハ三男毘沙門の
沙の宮をかゝとも御名をも沙

那智殿なるかとうらいとたちや
仏所をたれそ所もくるしの本陰
の月ゆるる人をあたに山里さく
花ゆ所のちりなん後ぞ社さくら
咲くきてあらいさちの事や切
松嵐花の紙とし雪とふり
雨とちる哀猿雲はけんてん

たちをなかりとや心そこかを
しるやゆ夕をはす寺のあること滝
ハ風て所そおそき奥ハくるの
山道の花うきくなる世方人を
殺くや切ものしけ程お借て見を
つまく名前のあるとくん愛宕高
雄のちう接ぶ屋横りけを探

吉野初瀬の名所をかぞへたぐ
ひあるべうもあらず（牛若上切引）さるみてもめ
なれぬ人なほ秋をなくき
めぬ袖をなれぬ名をかぶりまを
今は何をうつむくき秋とのみな
（シテ上）
年をふる大天狗は秋なり（里）君源
の弟子をなく兵法をさつをなり

年家を討せやうさんとおもふ松ほ
ゝ（ハル）明日集會（スム）しさうをさ
いしく客僧は大僧正の答をうけて
雲を踏て死くに行き雲を踏くに
（牛若上）
ゆゝ（ヒヤイ）ゆゝ（キヨシ）ゆゝ沙彌形のうつ也を肌ゝ
ゝ花桜の単子に影文殊のしくを
ゝ露を愛ゝ扇子懸白糸の

膳巻白柄の長刀たくみ天魔鬼
神あり桜さく嵐の山桜され
やうなり出立て長谷早苗静
鞍馬の奥僧正ヶ谷大天狗なり
あつぱ法師天狗ハ法師
あつぱ法師天狗ハ法師
白雪の相撲坊大山の伯耆房
豊前房四郎ヶ
飯綱の三郎冨士太郎大郎前鬼
高天ヶ原ヶ
比良横川
秋葉三尺坊
そんく人魔
なるかぬ雲となつく風の
僧正ヶ谷を動かし

嵐こがらし滝の音に天狗たちをどろ
おどろかしや（働キテ）めるよ沙那を駆唯
今小天狗を法の
秘術へいろ行ひ松ひろ（牛若）さん作
うしてをも切付稚児のきぬをも
せや廣ふしつれ世迷ひやきう
まつさんと思ひとまりてしたおろ（シテ）

ゆきくくもうもうもうもうもうもう
めりあるゆりくきうせやきう湿
の高祖ゆえ法ひとり強をいつ
そのゆえ名ゆる馬とくゆきつひ
たとしまは彼たの省を滑其省
とりく得させよといひなをし思ひ
しりを省を取くくもうしみ其ほん

膝巻白柄の長刀たくみ天魔鬼
神ありけさうの嵐の山桜され
やうなりき紅葉山立られ 長ジテ 早苗 静ニ 抑見そ
鞍馬の奥僧正谷に大天狗なり 古上 以前
あつぱ僧天狗はたまくう箒
ゐる 市 義山に豊前房 四郎 ドル ナア
白峯の相撲坊大山の伯耆房

飯綱の三郎 冨士太郎 大 ドル ドル ドル 前鬼
う一流うきく高天 ドル ドル ドル ドル
俗 遍 ゴル 松ゐてゐ 比良 横川
ゐ ゴル ゴル ゴル ゴル ゴル ゴル
ゐ 山 ゴル 秋 ドル 修験 ドル 言雄のみ
そんく人 ゐ たゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ
なる ゐ 雲 ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ
僧正谷 谷 ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ ゐ

嵐こがらし滝の音天狗たちをどろ
おどろかしや（働キシテ）めるよ沙那を駆唯
今小天狗を法の師に法の
秘術いろ行ひ（牛若）さん作
らしてもも切付て替古のきハをも
せゝ屋ハらしられ世ハ迄るやきら
まゝさんと思ひとまりてハ（シテ）おら

ゆきくゝきらつもきまる
めしあるゝ給りくきせゝきら湯
の高祖ハ屋ハりり強をいこり
きの黄石公なる馬よくゆきいひ
たゝまに彼ハたの書を滝其書
とりく得させよといひなきし思ひ
しる世書を取くきくしゝ其ほい

左右を一度おとしめやしなうもあれ
ども大事を待つるきは
なほそ当を過取指らて
当を指りくく馬のとなれ石公ま
ちもせもをすそ心うけ吾法の奥
像を傳くけもそ其ふとくま和上鶴
もくさもそなのあれは有さは

みくく姿をこころ天物を所
迎や坊主を待賞既へるも大
事を故さを待くく平家をふ
もとおりめすややさの心
さやか抑武略のかまれの道
くく源平藤橘四家ともうわき
彼家の水をそ清和天皇代原氏

とて、所々、晴天をかんがへ、
たゝり騒れる平家を西海へ遣
はし、遠波蒼波の浮雲より
飛行の自在をうけ、敵をたい
らけ會稽をせめ、きうん、ひかをもる
今は是まで有やいなや海上
立ゆきうらは若狭うすり浦く

もゝ立のうりに名所あり西海四
海の合戦とゝもうけ給へとそれ
まゝ弓矢の道ちゝ法に寄る
今はたゞめやもの免とタうけ
くゝきたのめやさみめゆゝ
ゆゝまれ本まるうけ〻く失るう

255
111

著作權所有

明治四十一年二月十日印刷
明治四十一年二月十五日發行

著作者　奈良市東城戸町三十八番地　金春七郎

發行兼印刷者　東京市日本橋區通四丁目七番地　江島伊兵衛

發行所　同市同町同番地　梳屋謠曲書肆